

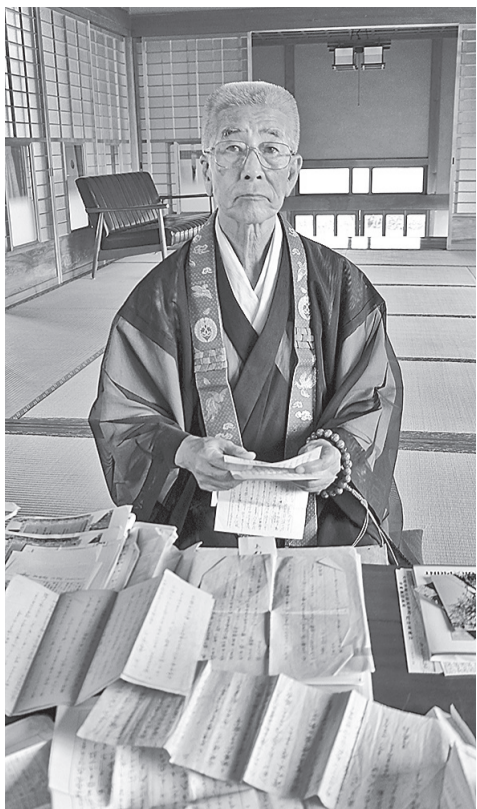
終戦70年 体験を語る

⑥

終戦から70年。戦争体験者も高齢化し語れる人も少ない。当時子どもだったという世代は、おぼろげながらも記憶にとどめている。その記憶をたどって、子どもの頃に体験し今も強く心に残っていることを、3人に聞いた。

父戦死の知らせに 母は花瓶を落とし泣き崩れた

滋賀県高島市・杉生慶道さん



父は陸軍に入隊。昭和4月にセブ島で戦死し、和19年1月にフィリピンに帰国した。大阪の堀川国民学校男女57人がお寺にいた

20年5月のことです。今もはっきり覚えています。私は郵便配達員さんから手紙を受け取り、本堂にいた母に手紙を渡しました。

阿弥陀さんへのお花を供えようとしていた母は、その花瓶を落として泣き崩れ、「お父ちゃん、なんで死んだんやあ」とひびきを何度もたいていました。

その手紙は、父の戦死の通知でした。その晩私と妹をお風呂に入れてくれた母が泣いていたのを昨日のことのように覚えています。

疎開児を受け入れ、気丈に振る舞い、子どもたちの世話に奮闘していた母でした。しかし、心の底はどんな気持ちだったんでしょうか。「お父ちゃん、なんで死んだんやあ」の声を思い出すたびに戦争を思い出し、身震いしてしまいます。

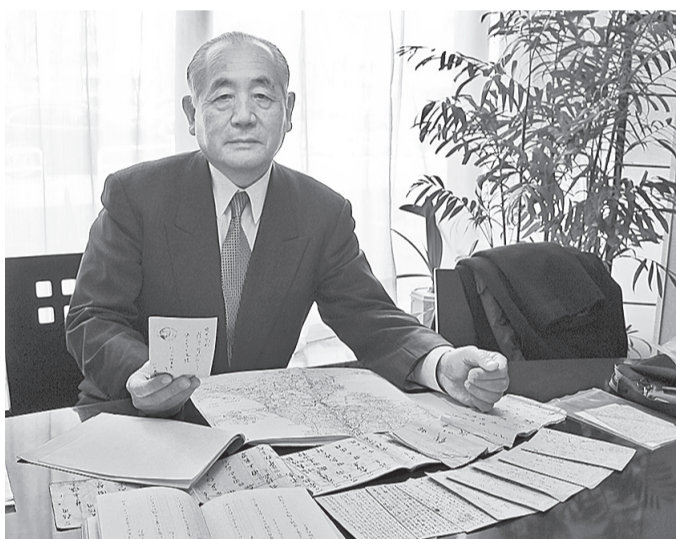
母は平成14年に亡くなりました。遺品を整理していると、大切に残っていた父からの手紙が出てきました。結婚して間もなく出征した父は、母を思い、心

を強く持って生活するよようにとあれこれ指示しては「いけませんよ」と言っていたが、出征してからは「お父ちゃん、なんで死んだんやあ」とひびきを何度もたいていました。

父のことでただ一つ覚えておられるのは、出征した。気が付いたら長年、慶寺前住職、75歳

年末になると口にした 母の言葉が耳から離れない

神奈川県厚木市・山口格夫さん



昭和19年、宮崎島の専売公社に勤務していた父に召集がかかりました。そのため、母と私たち兄弟3人は祖父が暮らす鹿児島に縁故疎開しました。

父は終戦直前の昭和20年7月にフィリピンのルソン島で戦病死したそうです。あの頃、敗戦状態で闘うことができません、ほとんどの人が栄養失調状態からの戦病死だったそうです。家に生きて帰れなかった父のことを思う

昭和19年、宮崎島の専売公社に勤務していた父に召集がかかりました。そのため、母と私たち兄弟3人は祖父が暮らす鹿児島に縁故疎開しました。父は終戦直前の昭和20年7月にフィリピンのルソン島で戦病死したそうです。あの頃、敗戦状態で闘うことができません、ほとんどの人が栄養失調状態からの戦病死だったそうです。家に生きて帰れなかった父のことを思う

と、どんなに無念だったことか。昭和23年、戦死したという紙が入った木箱だけが帰ってきました。村を上げてそれを迎え、兄と一緒に上座に座らされたことを覚えておられます。

たぶんそれが葬儀だったんでしょう。

「お国のために戦死… 遺族になんて恐ろしいことを」

東京都杉並区・伊丹郁子さん



28歳で戦争未亡人となった母は、子ども3人を育てるために、祖父から譲り受けた山や土が耳から離れません。私のような苦しみを味わう子どもが出ない世の中にしたいです。

父は「なんでも恐ろしいことを言うていたのか。簡単なあきらめられることではない。わが身になれば、よくもまあ、あんなことを」と悔いていました。忘れられません。

小学3、4年生の頃、袈裟を着て集まり、父が導師を務め、盛大な葬儀が営まれたのを覚えています。その後、戦死者が次々と出て、忠魂碑の国のために戦死されたたくさんの僧侶が七条前での葬儀になってい

私も3人の息子がいますが、折に触れ、戦死した兄のことを話しながら、「戦争は絶対にダメ。70年間戦争のない時代が続いた重みを感じてほしい」と話しています。あの時代を経験したものでないとわからないこと

小学3、4年生の頃、袈裟を着て集まり、父が導師を務め、盛大な葬儀が営まれたのを覚えています。その後、戦死者が次々と出て、忠魂碑の国のために戦死されたたくさんの僧侶が七条前での葬儀になってい

「三重県桑名市・浄光寺出身、88歳」